

慢性副鼻腔炎の細菌学的並びに病理組織学的研究

著者	鈴木 達郎
号	775
発行年	1973
URL	http://hdl.handle.net/10097/19037

氏 名（本籍） ^{すず}鈴 ^き木 ^{たつ}達 ^{ろう}郎

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 7 7 5 号

学位授与年月日 昭 和 4 8 年 2 月 2 1 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

最 終 学 歴 昭和 3 0 年 3 月
岩手医科大学卒業

学 位 論 文 題 目 慢性副鼻腔炎の細菌学的並びに病理組織学的
研究

（ 主 査 ）

論文審査委員 教授 河 本 和 友 教授 笹 野 伸 昭

教授 石 田 名 香 雄

論文内容要旨

緒 言

慢性副鼻腔炎の病態については種々の研究が行われているが特にその成因については諸説が唱えられている。即ち解剖学的条件説、体質説、アレルギー説、細菌説、血管運動神経説である。又その他に貝塚は慢性化の原因に塵埃とそれに附着している細菌による異物性炎症を主としていると述べ、又昇塚は小児慢性副鼻腔炎の発症については遺伝的制約よりも蛋白質の代謝異常が直接間接的に大きな影響を有すると推論している。しかしこれらの因子が単独で慢性副鼻腔炎を形成するのではなく色々の因子が重なり合って炎症を遷延していると思われる。しかし慢性副鼻腔炎の病態及び慢性化の成因を細菌に求める考え方は極めて多く古くから多くの研究がある。

又菌検出の方法としては (1)上顎洞穿刺による洞内細菌の培養 (2)犬歯窩削開後の貯溜液採取による培養 (3)摘出粘膜磨砕後の培養 (4)組織内細菌の染色 等がある。菌検出の成績としてはインフルエンザ菌の検出多しとするものと Staphylo. Strept. が多いとする報告がある。又これらの好気性菌の他に副鼻腔が膿性分泌物によって充満され或は自然孔閉鎖に伴う流通障害により上顎洞に嫌気環境が作られるとして嫌気性菌の検索を行なった多くの報告もみられる。又一方慢性副鼻腔炎の特に上顎洞粘膜に対する病理組織学的分類を行なった報告も多く、更に細菌感染の有無とこれに対する副鼻腔粘膜の反応態度についての研究もみられる。本研究は近年種々の抗生物質が開発され生活環境の変化を来している現在における慢性副鼻腔炎の細菌学的な検索とそれに伴う上顎洞粘膜の変化についてその病態解明を目的とし粘膜の病型分類にこだわらず粘膜に見られる浮腫、浸潤、線維、嚢腫、リンパ浮胞、壊死等の変化の強さを数値で表わす試みを行ない、細菌感染との関係について検討した。

材料及び方法

検査すべき患者は何らかの鼻症状を訴えて訪れたものでX写真でも一見して慢性副鼻腔炎の診断可能なものをえらび、犬歯窩を削開後、貯溜液の性状を確かめ滅菌綿棒で上顎洞内貯溜液を採取、好気培養はB T B培地、血液寒天、チョコレート寒天で、嫌気培養はLiver-Veal血液寒天培地、肝タブイオンを使用、嫌気環境は黄燐法に従い培養を行なった。又病理組織検査は条件を一定にするため、上顎洞底より粘膜を採取、ヘマトキシリン、エオジン染色を行ない検鏡した。

所 見

細菌の検出率については好気性菌 47.9%、嫌気性菌 5.3%であった。菌陰性洞は374洞中175

洞(46.8%)であった。検出菌は圧倒的に Staphylo. 及び Strept. が多く、嫌気性菌では Bacteroides と Peptococc. が多かった。上顎洞貯溜液と菌検出との関係では膿性成分のものに菌検出率が高かった。更に菌陽陰性と洞粘膜病変との関係を見るに浮腫性の変化は菌陽性陰性に関係なく出現し浸潤性の変化及び線維性の変化は菌陽性群にやや多く見られ嚢腫形成は菌陰性群に多く見られる変化であった。又リンパ滲胞は圧倒的に菌陽性群に多く出現した。貯溜液の性状と粘膜病変との関係では浮腫性の変化は貯溜液の性状と関係なく、浸潤性の変化は膿性成分のものに多く嚢腫形成は膿性成分の少ないものに多い傾向を示し、リンパ滲胞は膿性成分のものに多かった。

考 察

慢性副鼻腔炎よりの検出菌についてインフルエンザ菌が多く検出されるとするものと Staphylo 及び Strept. が多いとするものがあるが今回の検索では圧倒的に後者が多く検出された。貯溜液の性状と菌検出率の関係をみるとやはり膿性成分の多いもの程菌の検出率が高かった。又菌の陽性陰性と洞粘膜病変、特に浮腫性の変化については、狭義のアレルギーによるとするものと細菌アレルギーによるとする説があるが此度の検索では浮腫性変化は細菌感染と特に関係づけられなかった。浸潤、線維性変化は菌陽性群にやや多い変化としてみられ、嚢腫形成は菌陰性群に多い傾向がみられた。

結 論

菌の検出は膿性成分の多い貯溜液程検出率が高く、Staphylo. Strept. が多く検出された。粘膜の浮腫性の変化は貯溜液の性状と関係なく出現し、又菌の陽性陰性とも関係がなかった。副鼻腔炎の慢性化はこれら細菌叢に他因子が加味されて複雑な病態像を示すと考える。

審 査 結 果 の 要 旨

耳鼻科領域疾患のなかで慢性副鼻腔炎の占める頻度はきわめて多く、その病態解明のための研究報告は膨大である。

しかし近時、抗生物質、酵素剤の発達活用、生活環境、栄養の改善、集団検診等多くの要素がこれに加味されてその病態像にもかなりの変遷がもたらされ往年の如き高度病変例を見る機会は少なくなった。

従来より本疾患における病変慢性化の成因は鼻科学の重要課題とされており、解剖学的条件説、細菌説、アレルギー説、血管運動神経障害説等の論議がなされている。

著者は上述の諸問題に関する一つの手掛を得るためにも、現時点におけるこれら慢性副鼻腔炎の病態の推移を把握解析すると共に、洞内細菌叢、洞内貯溜液の性状、手術時摘出せる洞粘膜の病理組織学的観察を行ない、これら各要素が如何様に病変像を表現せしめているかを追求し、従来の所見と比較検討を試みた。

研究対象となったものは慢性副鼻腔炎の診断の下に入院手術を施行せる症例に限定し、手術時に洞内細菌、洞粘膜を採取観察した。

細菌の検出率は好気性菌 47.9%, 嫌気性菌 5.3%であり菌陰性洞が 46.8%と高頻度に見られた。

検出菌はやはり Staphylo, Strept が圧倒的に多く、以前より論議されてきた副鼻腔炎の慢性化において占めるインフルエンザ菌、嫌気性菌の意義を強調する段階に至らなかった。

唯きわめて貯溜液少量洞に於ても菌陽性が高い事実と、菌陰性洞が症例のほぼ半数に認められた事実等今後の副鼻腔炎病態解明に一つの問題点を提示するものとする。

次に洞粘膜病変と細菌叢、貯溜液性状との関係では浸潤型に菌陽性高く、貯溜液も膿性であるが、浮腫型は菌陰陽性とあまり関係なく、囊腫形成は菌陰性群に多くみられ洞粘膜反応形態には尙複雑な要素が加味されて表現されるものであり、その治療にも多くの示唆を与え得るものと推論している。